未来を花束にして

原題：SUFFRAGETTE

2015 年／イギリス／107 分／カラー

監督：サラ・ガヴロン
脚本：アビ・モーガン
音楽：アレクサンドル・デスプラ
撮影：エド・グラウ
編集：アレクサンダー・バーナー

キャスト：

モード・ワッツ　……　キャリー・マリガン
イーディス・エリン　……　ヘレナ・ボナム=カーター
サニー・ワッツ　……　ベン・ウィショー
アーサー・スティード警部……　ブレンダン・グリーソン
ヴァイオレット・ミラー　……　アンヌ=マリー・ダフ
エメリン・パンクハースト……　メリル・ストリープ

Ⅰ　100 年前のイギリス

この数年、イギリスのテレビドラマにはまっています。いまは『刑事モース～オックスフォード事件簿～』（脚本：ラッセル・ルイス）ですが、『刑事フォイル』（脚本：アンソニー・ホロヴィッツ）や『ダウントン・アビー　華麗なる英国貴族の館』（脚本：ジュリアン・フェロウズ）は欠かさずに観てきました。
イギリス流の劇作のうまさとあわせ、これまでほとんど知らなかったイギリスの現代史、その社会の実像のようなことを毎回教えてもらった、というのが観続けてきた理由です。
大きな歴史の裏側に存在する市井の人びと、というのはノーベル文学賞をとったカズオ・イシグロの『日の名残り』の構図でした。これらのテレビドラマは、大きな歴史ではありませんが、歴史と人間群像劇というところが実にうまく描かれていた、と思うのです。

『ダウントン・アビー』は 1912 年 4 月 14 日に 1500 人の犠牲者を出したタイタニック号の沈没に、ある貴族の相続人が遭遇し、死亡したという通知がもたらされたところからスタートします。
その後は、ダウントン・アビーという邸宅に住む貴族から、その使用人、周囲の住民たち、アメリカのお金持ちと結婚することでかろうじて領地を維持するしかない実情や、第一次大戦、アイルランド独立などを背景に、イギリス貴族社会が急激に解体し、庶民（市民）が発言権を得ていく、というイギリス社会の変貌がテーマでした。

この時期は、世界史的にはパックス・ブリタニカから、パックス・アメリカへの転換点と捉えられますが、ヴィクトリア女王が 70 年近い治世を終えたのが 1901 年という 20 世紀の幕開けのとき、まだまだ大英帝国の威光が残っていた時代です（ヴィクトリア女王が亡くなる直前に勃発したボーア戦争などで、大英帝国はかってない危機に陥り、極東の安全保障のために、成り上がりの日本と組まざるを得なかったのが 1902 年の日英同盟でした。国内的には労働党が 2 議席を初めて獲得するのが 1900 年でした）。

今回の『未来を花束にして』は、タイタニック号の 1912 年から 1913 年（正確にいうと 6 月 4 日のエミリー・デイヴィソンのダービーでの抗議と、ジョージ 5 世の出走場に蹴られ、死亡した 6 月 8 日まで）の間のイギリスの女性参政権運動、特に「サフラジェット」と呼ばれた女性活動家たちを描いています。
そして、今回この作品を選んだのは、案内にも書いたように今年がイギリスで女性参政権が誕生して 100 年という節目の年だからです。

Ⅱ　サフラジェット

この映画の邦題は『未来を花束にして』と少女趣味的な、情緒的なタイトルになっていますが、原題は「SUFFRAGETT」（サフラジェット）です。

suffragette とは 1906 年に『デイリー・メール』紙の記者が、戦闘的な女性参政権獲得運動を行う女性たちを指して用いたもので、ジャーナリストがつくった蔑称でした。

女性参政権論者を指す英語としては suffragist という言葉がありました。言葉の語尾に「ette」をつけると名詞が女性化し、小型化し、「劣っている」「とるにたりない」「まがい物」といった否定的な意味が含まれるとのこと。葉巻の cigar が cigarette となる、例があげられています。

要するに、記者が矮小化したイメージを付与するために造語した訳です。

Emmeline Pankhurst

戦闘的な女性参政権運動家＝サフラジェット、その対比で穏健・平和的な女性参政権者＝サフラジストという使われ方が以降、定着します。

ちなみに、メルリ・ストリープが演じたサフラジェットのリーダー、エメリン・パンクハーストの銅像が国会前広場に建てられたのは 1930 年でした。そして、サフラジストのリーダー、ミリセント・フォーセットの銅像が建立されたのは今年、女性参政権獲得 100 周年を記念してのものでした。90 年近い差ですね。なお、サフラジストたちが参加したのは女性参政権協会全国同盟（NUWSS）で、1897 年に結成されたナショナル・センターです。他方、サフラジェットたちは女性社会政治同盟（WSPU＝Women s social and political union）に参加しました。

WSPU のモットーは設立当時から「Deeds not Words」（言葉ではなく行動を）でした。映画でも繰り返し、出てきました。

当初、WSPU の機関紙名は「VOTES FOR WOMEN」（女性に参政権を）でしたが、破壊活動を巡って組織が分裂し、新機関紙名を「The Suffragette」に変更しています。

悪意の命名が、機関紙名にまでなった訳です。

そして、この映画のタイトルにまでなったということでしょう。

Ⅲ　二人の主役

この映画の二人の主人公について書きます。

昨日、神本美恵子参議院議員とこの映画について話しました。映画館で観た神本さんは「ラストの葬儀のシーン、映像が実写の記録に替わっていくところが、とても印象的だったわね」ということでした。

そうです。この映画は、実在したエミリー・デイヴィソンの死が強烈でした。

時間がないので、この人のことは、資料につけたブレイディみかこさんが『図書』に書

いた 4 回のエミリー・デイヴィソン論を家に帰ってからでもお読みください。（これまで飛び飛びに 4 回ですが、未完です）

私は、このプレイディみかこさんの文章を読んで、女性参政権運動の激しさ、熱さを初めて知りました。この映画を取りあげたいと思った一番の理由です。

蛇足的に加えますと、この競馬シーンは馬の走るコースがあまりに狭く、違和感を持ちました。資料に実際のダービーの様子の写真をつけました。私たちが東京競馬場でみるようなくらい馬が走るコースは広いです。

また、彼女は自殺したのではないか、という節が古くから言われたそうですが、反論の第一は彼女が競馬場から戻る列車のチケットを買って持っていた、こと。

さて、もう一人の主人公はキャリー・マリガンが演じたモード・ワッツ。洗濯工場で働く 24 歳。母も洗濯女、工場監督からセクハラを受け、夫と男の子を持つ母です。こちらは実在したわけではありません。フィクショナルな存在です。

この普通の、少し美人だから工場で目をかけられて来た女性がどのように社会を認識し、活動家となっていくのか、が大きな一本の糸としてこの映画を貫きます。目覚めた結果、職場を奪われ、子どもは養子にだされるということになってしまうわけですが。

モードをていねいに描くことで、私たちは大英帝国の内実、不潔で苛酷な工場労働、セクハラとパワハラが蔓延する工場監督者との上下関係、親権をもつこともできなかった母親のことを知ることができます。（女性が親権を持つことができるようになるのは 1925 年です）

Emily Wilding Davison

Ⅳ　映画理解の補助線をいくつか

時間があまりないので簡単に。

○　サフラジェットたちの闘いと監獄に入った数などは資料を。

1913 年 3 月～14 年 7 月までサフラジェットたちは毎月、放火を行っています。一番多い月は 11 件にのぼります（映画で対立が深まる時です）。逮捕者、入獄者の数も三桁です。

そこで、注意していただきたいのは放火のデータが 1914 年 7 月で終わることです。そうです。ここで第一次世界大戦が勃発するのです。

○　パンクハーストらの写真は資料を。

映画で見落としてしまいそうですが、サフラジェットたちは集会で常に旗を持っています。日本に赤旗のような単調なものではありません。色彩鮮やかな意匠をこらしたバナー（横断幕）です。いまネット上でバナー広告ということで言葉になじんでいますが。彼女たちは表現、パフォーマンスに大変気をつかい、工夫して訴えを伝えようとします。

○　エメリン・パンクハーストには二人の優秀な娘がいて、母親の活動を支えます。
しかし、映画でも描かれたように放火などの過激な方針をめぐって組織は分裂します（日本や独伊の 1970 年代過激派と重なります）。
その時に母親と長女・クリスタベルと袂を分かつのが、次女のシルビア・パンクハーストです。彼女は反戦・平和運動に一生をささげ、ムッソリーニ、ヒトラー、スターリンを批判した国際的な運動を展開します。この辺は今回知りました。
中村久司著『サフラジェット　英国女性参政権運動の肖像とシルビア・パンクハースト』（大月書店）が詳しいです。

○　映画の導入部で、長い女性参政権の前史が語られます。
イギリスで二世紀半継続していた奴隷貿易が廃止されたのが 1807 年、女性参政権の請願書が国会に出されたのが 1832 年、日本では天保 3 年のことでした。1866 年にロンドンで「女性参政権付与委員会」が誕生、この年、あのジョン・スチュアート・ミルが国会に女性参政権の請願署名を提出しています。

○　映画のエンディングで、世界の女性参政権獲得の年代が写されます。
イギリスの女性参政権運動は第一次世界大戦によって中断され、愛国的な工場労働へ女性を導くことに積極的にかかわります。そして 1918 年に女性に参政権が付与されますが、30 歳以上などの制限があり、男女同権としての女性参政権は 1928 年にようやく獲得できたのでした。
しかし、世界で最初がニュージーランドで、オーストラリアも早いので本国イギリスの運動がこれら旧植民地に多大な影響を与えたことが見てとれます。（囚人が開発した島で女性が少数であったことも影響していると思いますが）

○　ロイド・ジョージが出てきます。当時、自由党の国会議員で大蔵大臣。この時代の首相は、ハーバート・ヘンリー・アスキス（1908～1916 在職）です。
そして、この映画でもっとも断固たる戦闘性を持つ薬剤師イーディス・エリンを演じたヘレナ・ボナム＝カーターはアスキス首相のひ孫なのです。
資料にヘレナ・ボナム＝カーターを載せていますが、『眺めのいい部屋』（ジェイムズ・アイヴォリ

ー監督、1986 年）が強烈な印象として私には残っています。なお、ロイド・ジョージは1906 年から 22 年間、首相をつとめています。

○　日本への影響として戦前、婦人参政権獲得期成同盟会（婦選獲得同盟）の機関紙『婦選』は、シルビア・パンクハースト著『The Suffragette』の抄訳を連載していたとのこと。市川房枝は寝室に「VOTES FOR WOMEN」と書かれたプラカードを掲げたパンクハースト夫人をモデルにした人形を飾っていたそうです。
公益財団法人市川房枝記念会女性と政治センター
https://www.ichikawa-fusae.or.jp/ が今年 5 月、『女性参政 70 周年記念　女性と政治資料集』（B5 判 160 ページ、2,160 円）を刊行しています。

○　イギリスの女性政治家。
いまのテリーザ・メイ首相は、マーガレット・サッチャーに次いで、二人目の女性首相です。スコットランド自治政府首相、スコットランドの最大野党・保守党、ウェールズのプライド・カムリ（ウェールズ党）、北アイルランドのシン・フェイン党、民主統一党、これらの政党はいずれも女性が党首です。
英国下院の女性議員は 208 人で、32%を占めます。労働党は 45%になります。
2017 年にロンドン警視庁の警視総監に女性が就任。
2013 年、ナショナル・センター「労働組合会議」（1868 年結成、560 万人）に初の女性書記長が誕生。世界最古の地方自治体ロンドンの「ザ・シティ」市長も女性です。
ドイツもアンゲラ・ドロテア・メルケルだけではありません。ドイツ社会民主党（SPD）の党首に今年、女性が就任しています。

○　今回、映画のパンフレットを買ってあったと思ったのですが発見できず、映画専門の古本屋にもなく、ネット販売もありませんでした。そのため、ネットで関連情報を探してそのレベルの低さに驚きました。
例えば、『未来を花束にして』という邦題について、これは上映するのが岩波ホールだから、という批判的な書き込みが相次いでいたのですが、岩波ホールではなかったのですね。私はてっきりそうかと思い、岩波ホールに電話してガセ情報だったと知りました。
あと、紙がもったいないので資料にしませんでしたが、（笑い）を多用した感想も多かったです。この映画に共感するのは、電車で女性専用車にのるような人だけだ、といった類です（女性が書いていました）。
こうしたネットへの書き込みを読むたびに、歴史は、ある距離をもって接するしかないものだ、ということを自戒しながらいくしかありません。
そして、あのような熱を持った人びとが新しい地平を切り拓いていける、その果実は先にあげた女性の政治家たちの立ち位置がはっきりと示していると思うのです。

さて、次回は６月２３日が第四土曜です。いま、候補作は浮かびません。
この間、ちょっとシリアス路線過ぎたかな、という感じもしますが、皆さん考えを。

（文・福田誠之郎　レイアウト：小竹雅子）